

発行：フォーラム・子どもたちの未来のために実行委員会

<http://www.f-kodomotachinomirai.com/>

文責／大竹永介

あけましておめでとうございます

「コロナ禍」で世界が一変した昨年。年があらたまっても、未だ感染の拡大は止まる兆しがありません。読者の皆様の中にも保育や介護の場、学校や図書館など、様々な場所で困難を強いられている方々が少なくないと思います。心よりお見舞い申し上げるとともに、今年こそ明るい未来の開けることを祈念いたします。本年も宜しくお願い致します。

★新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちに多くの問題を突き付けたまま、新しい年を迎えてもまだ衰える気配がありません。今月は、児童文学作家のお2人に「コロナとの関わり」について原稿をお寄せいただきました。まずは「朔と新」（講談社）で第58回野間児童文芸賞を受賞されたいとうみくさん（写真）です。（編集部）

わたしたちを縛るもの

いとうみく



人はつねに、なにかと、だれかと比較して、幸せだとか不幸せだとかを測っているような気がします。そしてそれが自分を縛り、窮屈にしている。やだな、やめようとわかっているのに、気が付くとなにかと、だれかと比べて優越感に浸ったり、劣等感にさいなまれたり。

コロナ禍におけるいま、これまであたりまえにしていたことができなくなりました。学

校は長期の休校になり、オンラインでの授業が行われ、登校が始まってからも感染予防の対策として、時差登校が試されたり。行事の形もかわり、楽しくおしゃべりをしながら食べていた給食も、前を向いて黙って食べましょう……。ありとあらゆることが変化しました。

いままで大切だと考えられてきたことや、あたりまえにしてきたことができない。

それもすべて、これまでとの比較です。もちろん、変えたくないこと、変わってはいけないこともあります。人と人の結びつきというのはその最たるもの



いとうみく

かもしれません。

そうした変えてはいけないものはあるにしろ、過去と比較をして、同じことをしなければいけない、同じことができなければかわいそうだ、という価値観は改める必要があるのではないかと思います。新しい価値観などという大層なことではなく、これまでとは別の形でそれらをつないでいくためのなにか。

「これができない」ではなく、「これができる」と言えるわたしになりたい。理想ですが。

(いとうみく：1970年生まれ。東京都出身。「糸子の体重計」(童心社)で日本児童文学者協会新人賞、「空へ」(小峰書店)で日本児童文芸家協会賞を各々受賞。「チキン」「天使のにもつ」など著書多数。「季節風」同人)

★もうお一人、工藤純子さん(写真)からはコロナと学校の問題についての論考です。

コロナと学校改革

工藤純子



2020年、日本の教育改革の年、世界はコロナに見舞われました。欧米や中国が学びをオンラインに切り替える中、日本は、家庭だ、学校だと責任を押しつけ合いながら、三か月間も学ぶ機会を失ってしまったのです。学習指導要領の改革よりも、まずは学校の改革に力を入れるべきではないかと強く思いました。

オンライン学習が進んでいない原因として、日本の学校教育費が少ないのはもちろんですが、16万人いるといわれている不登校の子たちを放っておいたことも、理由のひとつにあげられると思います。さまざまな事情で、学校に来られない子どもたちがいます。その子たちに対して、「無理して学校に来なくてもいいですよ」というメッセージを発信しておきながら、それぞれの子にあった学びにつ

いて真剣に取り組んでこなかった国の対応が、このような結果を招いてしまったのではないのでしょうか。

学校は、学ぶことが目的であり、登校することが目的ではないはずです。もし、学校に来られない子たちのために、オンライン授業を用意していたら…
…、それらを利用できたのではないかと思うのです。オンライン教育やＩＣＴが進めば、一人一人に対応する個別の学びが実現し、現在困っている子のすくいになるかもしれません。一人の子をすくうことが、多くの子をすくいあげることに繋がります。



「学校は、だれのものか？」と問われれば、「子どもものに決まっている」と答える人は多いでしょう。しかし実際は、そうなっているのでしょうか？
意味不明な校則が、大人たちから押しつけられることがあります。毎年行われる全国学力テストは、地域ごとにランキングされるため、事前テストなどで平均点をあげることに必死になる小学校もあります。これらが真の教育とは、わたしには思えません。

休校で遅れた授業を取り戻すため、先生や子どもたちに大きな負担が課せられています。その一方で、学校行事の見直しや、子どもたちが考えた、ソーシャルディスタンスの中で楽しめる運動会、校庭キャンプの修学旅行など、今までではできなかったことに目を向けている学校もあります。また、40年ぶりに公立小中学校の学級人数が、35人に引き下げられるというニュースもありました。これからも、学校がどんなふうが変わっていくか、しっかりと見つめていきたいと思います。

(くどうじゅんこ：1969年生まれ。東京都出身。「てのひらに未来」「あした、また学校で」「となりの火星人」「セカイの空がみえるまち」(児童ペン賞少年小説賞)「恋する和パティシエール」シリーズなど。「季節風」同人)

●2021年最初のフォーラムニュースです●昨年大晦日には東京都だけで1337人、全国では4500人を超える感染者と、新型コロナウイルスの脅威は衰えることなく、年明け後も感染者数は過去最多を更新し続けています●首都圏1都3県の知事による強い要請を受けて、さすがに腰の重かった政府も今週末には二度目の緊急事態宣言を発出するようです●個人的には遅きに失した感もありますが、感染の拡大抑止のために全力で当たってもらいたいもの。経済を回さなければ、というもっともらしい声の下で「生命」が軽んじられることのないことを祈るばかりです●私たちの活動にも当分制約が続きます。フォーラムにできることは何か？ まだまだ自問自答が続きます。本年もよろしくお願い致します。(1/6記・大竹)